

「戦争を止めてほしい」
誰もがそう思っているはずなのに、
戦争が始まってしまった。

新作『いまはむかし～父・ジャワ・幻のフィルム～』はもう二度と戦争をしてはいけない、というメッセージを、映画人としてプロパガンダ映画を製作し、80年前のあの戦争に加担した、父・伊勢長之助の在り方を見つめ直すことで、描いた映画だ。

父が、戦時中、三年間にわたって創り続けた100本に及ぶプロパガンダ映画…。

戦後、反戦の思いを込めて製作したニュース速報『世紀の判決－東京裁判』…相矛盾する映画の存在を通して、「戦争」を考えるドキュメンタリー映画を創ろうと思いたったのは三十数年前、完成したのは昨年夏だ。まさか半年後に新たな「戦争」が始まるとは、思ってもいなかった。

昨秋、東京で封切られ、11月にはオランダ・アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭の3部門でノミネートされ、大きな反響を呼んだ…「勇気」のある映画だ。

そしてつい先日、アメリカ・ハワイでの「AAS Film EXPO」という、世界の研究者たちの集まる学会で『いまはむかし』(Now is the Past)が上映された。そこでもまた「勇気」という言葉で賞賛されたのだ。どうやら本当に「勇気」ある映画なのかも…。

(ハワイ上映の感想から)

“歴史についての大変重要な映画ですね。これが私的な、家族の歴史であるという事実で、さらに心に強く訴える物語になっています。あなたのお父さんが制作に携わっていたプロパガンダ映画を観るのはとてもよかったことでしょう。”

“本作品がとても気に入りました。私は韓国から参加しており、なぜ韓国の映画製作者たちがベトナム戦争時の戦争犯罪についてドキュメンタリーを撮らないのかと考えておりました。この問題を取り上げた、あなたの勇気を讃えます。”

“本作品は、アジアに共通する苦しみの記憶について、しかし日本の政治においては皮肉なことに今なおタブーとされることに取り組んだ点において、大変勇気がある。醜い事実に向き合った時にも直視するこの映画の姿勢に対し、私は敬服している。”

“ウクライナでの戦争を考えると、本作品の上映はとてもタイムリーだと思いました。本作品を見るのはつらいのですが、ここに含まれる情報は大変重要です。この作品が、あなたが受け継いだ苦しみを癒しているといいなと思います。平和が広まりますように。”

アメリカ、韓国、中国、インドネシア、ネパール等から集まった方々が真剣に映画を受け止めてくれた。上映後のQ&Aでは最初の質問が、「どうしたら、今のロシアとウクライナとの戦争を止められると思いますか？」だった。会場の多くの人が考えていることも、同じだったに違いない。

私は「私も聞いてみたい質問です…。ずっとそのことを考えているのですが、私に言えることは、“いま”は“むかし”です。歴史に遺された事実、記録をもう一度しっかり見つめ直し、考え続けることを、一人ひとりが他人事ではなく自分事としてすることだ…と思います。」と、答えた。

それから一時間以上、映画の問いかけに答えるような、語り合いが続いた。

「いまはむかし」「むかしはいま」

「いま」だからこそ上映してほしい。

「いま」だからこそ観に来てほしいのだ。

映画を観て「戦争を止めてほしい」という思いを、自分自身に問い続けることも、「勇気」に違いない。

映画を創ることも観ることも、

「勇気」に触れることなのだ。

伊勢 真一